○肝付邦憲 (千葉工業大学・工経)

On Sentence Expression as One Method in Interface (1)

Kuninori KIMOTSUKI (Chiba Institute of Technology, Dept. of I.M.)

I. はじめに

文書による情報交換はインターフェイスの中の1手法として、確実な方法といえる。分かりやすく確実に相手側に伝えるためには切れ目のない流れるような文脈の構成が欠かせない¹⁾。このような文章として、身近に新聞記事が存在する。その中でも、全国紙各社のかかげる社説には、立場の明確化と主張・解説がわかり易く活字化されている。私情の入らない正確さと読みやすさが不可欠という。

ここでは毎日新聞社の社説を例として、抄録を作成しながら次の事項を検討した。検討した項目は、1.文章構成、および2.漢字、3.カタカナ、4.符号類などの構成率、5.文末語の種類と出現頻度などである。これらの検討結果を中心にすえて、他社(朝日新聞、日本経済新聞)との比較も試みた。

II. 社説の収集

社説の取り扱い領域は故意に選択せず、可能な限り資料として活用することを心がけた。毎日新聞社の場合には、幸いに社説が課題毎に分類してある。この点は思いやりのある編集であると評価できる。

収集を始めた期日は、1993年6月からである。対象とした文字数は70万字をはるかに越えている。

ここで取り上げた主な課題は次の通りである。1.政治倫理、2.政治改革、3.地方財政、4.情報通信、5.ロシア問題などで、これらの文章構成を検討対象とした。

III. 結果の概要

上記各課題ごとの文章構成は1文章中に含まれる文字数/文が特長を表すことになる。これを1資料と位置づけて度数分布で表した。社説文のいくつかの分布内容を例示すると次のようになる。

1) 1994年2月26日(土)のロシア『懸念される大国主義の復活』では、文数が28で平均文字数が48.0文字/文となっている。升目充足率は96.6%である。文字数の区分(区間)を0から10文字ずつに区切ると、21-30文字と51-60文字の区間に出現頻度が高くなって、2峰性を示す。この社説には90文字の文が1つ含まれている。この社説を20文字ずつにまとめ直すと、41-60文字に最頻値のある1峰性の分布となる。

2) 同日の社説：政治改革『こんな修正では納得できぬ』では、文数が23と比較的少ない。平均で56.0文字/文で升目充足率は92.5%となる。ここでは90文字以上/文が3文も含まれている。90文字が1文、103文字が1つ、109文字が1つとなっている。文字数11から110文字まで10区間とした分布では文構成の特長をつかまえない。これを20文字ずつに区分し直すと、区間41-60文字に最頻値をもつ1峰性の分布となる。

3) 1994年2月25日(金)の政治倫理『「細川疑惑」説明は首相の務め』では、文数が24と少ない方である。平均文字数は55.0文字/文で、升目充足率は94.8%である。80文字

以上／文が5つもあり、この中には158 文字／文が1つ含まれている。

4) 同日の社説：ハイビジョン『21世紀への位置付けを示せ』は31文の構成で比較的多い。平均文字数は42.6文字／文で、升目充足率は94.9%となっている。80文字を越える文は1文だけで、84文字／文である。

5) 1994年2月19日(土)の地方財政『自治体の赤字体質に監視を』は50文で構成されている。平均文字数が25.3文字／文で少ない方に属する。升目充足率は90.8%である。このような文章構成では80文字を越える文はなく、65文字／文が最高の文字数となる。

6) 同日の社説：通信情報『マルチメディア社会への課題』は34文からなる。平均39.0文字／文で升目充足率は95.2%である。ここでも80文字を越える文はなく、71文字／文を最高とする。

IV. 考察に寄せて

崎 守(さきもり)²⁾によれば、「新聞の社説は、・・中略・・、解説するとともに、社としての見解を述べる。そこにはその社の見識と英知が集約されている、と考えていい。」ということになる。このなかでも社説一般に関する評価はきびしい。

社説には、1.はっきりした表現、2.客観性、3.わかり易さ、4.考え方の表明など、その社の基本姿勢が問われることになる。まさに見識と英知に立脚した公正にして厳しい洞察力が必要となる。この力を通して納得性の高い見解が活字となるのであろう。

かような位置付けが確立している限り、ここでは社説に対する内容評価を検討の対象外としたい。少なくとも20数名の論説委員が客観的に検討を加えて発表しているのである。

故に、ここでは、その内容に何ら批判をささむものではない。しかし、わかり易さは記事の命であろうと考える。これは書くものにとって、永遠の課題なのかも知れない。

この論法に従えば、文章表現には意見がい

くつかあってもいいのではないかと考える。

尾川正二¹⁾によれば、「1文平均字数として、30字ー45字が、いちばん読みやすいとされている。」という。

この下限の30字の2倍、つまり60字でも多すぎる。ましてや、上限の2倍の90字では、一読しても文脈は追えないかも知れない。

現時点で、毎日新聞・社説の集計では45文字／文前後のところに最頻値の存在を推察し得る。各執筆者が筆をとった結果を分布図にまとめてみると、 χ^2 分布に類似した構成となっている。このような分布の傾向は朝日新聞、日本経済新聞の社説でも同様である。文章表現の達人が鷹の目³⁾で見据えた事象を活字にした貴重な文章である。

しかし、文字数／文の下限は自ずと決まってくる。ハイビジョンの領域で、7文字の「釈然としない。」という文がある。

一方、上限は理論的には無限と設定してもよい。上の社説の例では、政治倫理の領域で158 文字／文が出て来る。まとめるのにいささか苦勞する。どうもこのような文構成は、執筆者の思い入れの深さを示しているのではないか。読者に分かって貰いたい、主張しておきたいという意志の現れと推察し得る。

V. まとめ

社説の中から拾い出した具体例をもとに、以上のような内容の検討を試みた。社説文は解説文でもある。短文化の方が文脈を追いつきやすいという説¹⁾が評価の根拠となる。1文中の文字数の「ゆらぎ」は、文書作成中の厳粛な事実として受け止めざるを得ない。(追記：他の資料はOHPで補足説明)

参考文献

- 1) 尾川正二：文章のかたちとところ 書くということ、p.47、筑摩書房、1991年12月刊
- 2) 崎 守：社説 平板かつ評論家的論調、週刊エコノミスト、p.55、3月1日号、1994
- 3) 【浅】：巻頭備忘、世界2月号、第591号、岩波書店、1994年